



東京都北区の隅田川と石神井川の合流地点で今、多発するゲリラ豪雨による浸水被害から逃れるため雨水を貯留し隅田川に放流する工事が進められている。2つの川の護岸と近接し、北側には首都高速中央環状線が走る。周辺には公園や小学校があり、住宅も密集している。狭く限られた敷地での仕事を任されたのが、大豊建設が得意とするニューマチックケーソン工法だ。この「王子第二ポンプ所」建設現場で工事係として働く石井千晶さんは「ニューマチックケーソン工法に取り組み女性技術者として将来が楽しみな逸材だ」（中杉正伸副社長）。

ここに来たのは平成29年5月。前年7月に男児を出産し産休・育休を経て現場に復帰した。地下30分に構造物を造るため同工法による本格工事が始まった時だった。同工法にあこがれて入社したので「夢がかなう会社」と喜んだという。

「トンネルが好き、地下が好き」というだけあって家事との両立も苦にしない。それだけの配慮を会社を感じる。「職場復帰を考えたとき、どうしても現場に戻りたいと申し出ると『頑張れ。期待している』と言われた。保育園の送り迎えを考慮して9時から17時30分の時短勤務を許された。子供の発熱など不意の体調不良



工事現場で後輩を指導する石井千晶さん

で急に休まなければならぬときも、上司は「できる範囲で精いっぱいやってくれれば十分」と認めてくれる。安心すると同時に、仲間の理解と協力に対し「頑張ろう」と仕事への熱意が高まるという。

惚れ込んだニューマチックケーソン工法の技術習得に挑む女性は今は石井さんだけだ。先輩から学んだ技術を引き継ぎ、後輩に伝えるのが役割と自覚する。一方で「3歳の子供が大きくなって時間を気にせず現場で仕事をしたいし、もうそろそろ『長（工事担当責任者）』になりたい。所長の夢もある」と将来を見据える。

平成25年の入社1年目から東京外環自動車道田尻工事（千葉県市川市）に携わった。開通前の見学会に子供と参加したとき「ママが造ったの、すごいじゃん」といわれた。このとき、ママと「建設小町よりたくましくて自分に合っている」ドボジョの両方の顔をのぞかせた。女性活躍には本人のやる気に加え、周囲の理解と協力が欠かせない。大豊にはその舞台が用意されている。

技術に惚れ込むドボジョ